

焼火窯について

島根半島の北方60キロ、日本海に浮かぶ隠岐諸島・西ノ島。

『焼火窯』は西ノ島町南部に位置する焼火山の麓にあります。

隠岐・西ノ島の赤土を陶土として作られた陶器や、風流染の染め物を販売しています。

岐阜県出身の加藤唐山氏、加藤洋子氏により事業展開

加藤唐山氏、加藤洋子氏について

美濃焼の本場、岐阜県多治見市の窯元の家生まれる。

美濃で陶芸の修業を積み、東京・名古屋と移り住みながら、静かに陶芸ができる土地を探していたとき、隠岐・西ノ島へと遊びに訪れました。帰りの船の中から、波止集落から大きく伸びる二重の虹が見え、まるでこの土地に歓迎されているように感じたことをきっかけに西ノ島へ移住。

平成9年(1997年)に、地元の土と地元の素材を使った釉薬を用いた、隠岐らしさにこだわった作品づくりを始め、航海安全の守護神として進行を集める焼火山・焼火神社にちなんで「焼火窯」と名付けました。平成22年(2010年)に、島根県ふるさと伝統工芸品に指定。地元の土を使った染め物「風流染め」も手掛け、西ノ島の伝統工芸として残しながら、隠岐地域の焼き物や染め物を広める活動も行っています。

元地域おこし協力隊により事業を承継

焼火窯は、加藤唐山氏、加藤洋子氏により事業展開されていましたが両名とも高齢であり、後継者不足に困窮されていました。

そのような中、西ノ島の伝統工芸を後世に継続させることを目的に事業承継をする人材の募集(地域おこし協力隊)を行い、以下の2名を採用し、平成30年4月から令和2年3月まで3年間活動に取組みました。

活動終了後もそれぞれ就業しながら、焼火窯での修行に励み、令和4年1月に『焼火窯』の事業が承継されました。

事業を承継するにあたり、陶芸・土染め体験の受入数上限を増加する目的として工房を修繕し、また、ある程度の商品在庫が抱えられるよう倉庫増築を行っています。

将来的な展望

将来的には、ネットを活用し商品を広くPRするとともに販路拡大をし、また、西ノ島の観光業の発展につながるような観光体験メニューの開発にも取り組んでいく予定です。

そのほか、地域住民の方々や移住を検討される方などの交流の起点となるような場所となることを目指しています。

池田八重子

静岡県出身・39歳 移住歴5年

前職は都内で生活雑貨店の副店長として、10年あまり就業していたが、都会的な生活や仕事に生きがいを感じなくなり、転職を決意。

WEBで西ノ島の「地域おこし協力隊として窯元の後継者募集」に応募し、採用。

令和4年1月より、焼火窯の事業を伴田さつきと共に承継し、現在に至る。

伴田さつき

東京都出身・31歳 移住歴5年

前職は奈良県の鞆製造会社に4年勤めていたが、工場のように分業で行う仕事ではなく、一から全て携われる仕事がしたくなり、転職を決意。

WEBで西ノ島の「地域おこし協力隊、窯元の後継者募集」に応募し、採用。

令和4年1月より、焼火窯の事業を池田八重子と共に継承し現在に至る。



伴田さつき（左）、池田八重子（右）